

## 良い社会を生み出す裁判

[聖書]出エジプト記 23章 1～9節

あなたは根拠のないうわさを流してはならない。悪人に加担して、不法を引き起こす証人となってはならない。あなたは多数者に追従して、悪を行ってはならない。法廷の争いにおいて多数者に追従して証言し、判決を曲げてはならない。また、弱い人を訴訟において曲げてかばってはならない。

あなたの敵の牛あるいはろばが迷っているのに出会ったならば、必ず彼のもとに連れ戻さなければならない。もし、あなたを憎む者のろばが荷物の下に倒れ伏しているのを見た場合、それを見捨てておいてはならない。必ず彼と共に助け起こさねばならない。

あなたは訴訟において乏しい人の判決を曲げてはならない。偽りの発言を避けねばならない。罪なき人、正しい人を殺してはならない。わたしは悪人を、正しいとすることはしない。あなたは賄賂を取ってはならない。賄賂は、目のあいている者の目を見えなくし、正しい人の言い分をゆがめるからである。あなたは寄留者を虐げてはならない。あなたたちは寄留者の気持を知っている。あなたたちは、エジプトの国で寄留者であったからである。

### [序] 侘しい礼拝

2月13日(金)午後1時30分川越駅前発のバスで成田空港に向かい、23日(月)午後5時15分ごろ無事、シンガポールから帰宅しました。お祈りを有難うございました。日本語教会の15日の礼拝に出席して、愕然とさせられました。以前は80人ほどの礼拝ホールで椅子が8分目ほど埋まる礼拝でしたが、昨年初夏から二階の300人会堂に移りました。10数人の子供と教師が子供説教の後で分級室に移動した後、30人弱がパラパラと広い会堂に散在して、ボソボソと礼拝を守っているのです。私の周りもがらんとし、誰も座っていません。心がスカスカして沈んでしまいました。岡村牧師が日本に帰って一ヶ月。こんな礼拝をしていたら、新しく来た人も、二度と来なくなるばかりでなく、会員も4回が3回、2回と来なくなり、遂には役目を持つ人だけの集会に落ち込んでしまうでしょう。

そこで私は気を取り直して、22日の日曜までの一週間に25人の教会員と個人的に会って話し合いました。22日の礼拝は、私の説教でしたので、高い講壇に上がらず、下の晚餐台に立ち、皆に前に移動してもらい、晚餐台を囲むようにして、説教を聞いてもらいました。一体どうしてこんな寒々とした礼拝になってしまったのでしょうか。後任牧師の人選を誤らず、またそれまでの空白期間をしっかりとサポートする必要があります。連盟の諸教会が10年間私たち夫婦を送り、祈りと献金で働きを支えて下さった成果が、このようになっています。どうかお祈りくださいますよう、お願いいたします。

### [1] 正しい裁判の条件

さて今日の聖書は、正しい裁判についてです。いよいよ日本でも裁判員制度がこの5月21日からスタートします。衆議院議員の選挙権を持つ人の中から無作為に選ばれた市民が、死刑か無期懲役・禁錮に相当する罪に係わる事件の裁判に、裁判員として参加するのです。有罪か無罪かの決定と刑の量を定める判決を、ほぼ同等の権限を持つ裁判官3人と裁判員6人の9人の合議で行ないます。専門家である裁判官と専門家ではない裁判員が、それぞれの知識経験を共有し、その成果を裁判内容に反映させるところに大きな意義があるのだそうです。「刑事裁判が市民の良識を必要としています」というポスターを見ました。

ところが25日の新聞に、「生徒の7割が死刑を選択」という高校の先生の投書が載っていました。1年生の公民の授業で、日本の死刑の歴史や現状を詳しく説明してから、先生は23歳の女性が同じマンション

の男性に殺害された昨年4月の事件をめぐる検察と弁護側の論点を紹介したそうです。そしてこの残虐な事件に、無期懲役か死刑かの判断を生徒たちに下してもらいましたら、生徒の7割が死刑を選択したそうです。しかしその18日後に東京地裁の裁判長は、「死者の人格、遺族の心情を踏みにじる極めて卑劣な犯行」と述べながらも、無期懲役の判決を下しました。そこで高校の先生は、「過去の判例を踏襲した無期懲役の判決は、高校生の出した死刑判決や、国民感情からずれている気がする」と述べていました。

もしもそうだとしますと、この裁判も裁判員6人が合議に加わることで、国民感情の影響を受けて判決が変わる可能性があります。正しい判決とは何か、難しいですね。今日は正しい裁判について学びます。

モーセの時代、エジプトの奴隷の境遇から解放されたイスラエルの民150万人は、紅海を渡ってシナイ半島に入り、アマレクとの戦いに勝ち、神の山の麓に宿営をしました。そこへ彼の妻ツィポラと息子2人を連れて、舅のミディアン人の祭司エテロが訪ねてきました。そしてモーセが一人で朝から晩まで、民衆のもめごとを裁くことに忙殺されているのを見て、千人隊長、百人隊長、50人隊長、10人隊長を選んで、小さな事件を裁かせ、大きな事件のみをモーセが担当するように助言しています(18章)。

以来イスラエルの民は、宿営ごとに長老を中心に裁判が執り行われるようになったのではないのでしょうか。カナンの地に定着すると、村の入り口の広場が、共同体の集会所になり、また法廷ともなって、裁判がなされたようです。そこで裁判の基準となるおきてが、十戒に続いて与えられました。それが21章から23章に記されています。

「あなたは根拠のない偽りのうわさを流して事実を分かりにくくしてはならない。罰に値する人に手を貸して、悪を助長する証人になってはいけない」(1節) 「多数者に追従して悪を行なったり、多数者に追従して片寄り、正義を曲げるような証言をしてはならない」(2節) 「弱い立場の者を不当に庇って、事実を曲げてはいけないし、貧しい者の権利を奪って、正義を曲げてはいけない」(3、6節) 「賄賂は聡明な人を盲目にし、正しい者の事件をゆがめるから、決して受け取ってはならない」(8節)

争いごとは、事実がどうだったのかを二人以上の証人の証言に基づいてはっきりさせ、その上で神のおきてに従って裁定が下されます。証人の証言が非常に大切です。そこで今日の聖書の個所では、正しい証言をするようにと、その戒めが繰り返されているのです。

## [2] 多数に追従せず、情に流されず

私はここで先ず多数者に追従するなど繰り返されている点を、取り上げたいと思います。以前に映画「タイタニック」が話題になった時、日本剣道連盟の機関誌にアメリカ人が作った小話を取り上げられました。沈没寸前のタイタニック号から救命ボートが降ろされ、女性、子供、老人が優先的に救助されました。成人男子は海に飛び込むしかありません。説得に当たった船長がイギリス人に向かって言いました。「貴方はジェントルマンですね」。彼は黙ってうなずくと、海に飛び込みました。アメリカ人には「これで貴方はヒーローになります」と言いますと、彼は微笑みさえ浮かべて飛び込みました。ドイツ人には「これはルールです」と言ったら、毅然として飛び込みました。

さて日本人には、船長が何と言ったのでしょうか。「貴殿はサムライである。婦女子のために一命を賭していただきたい」。すると彼は袴のすそを翻して風のように波間に消えていった——以前ならこうなるところでしょうが、今はそんな言葉は通用しそうもありません。そこで 船長はそっと耳元でこうささやいたそうです。

「皆さんがそうしておられますよ」。これを聞いて皆が爆笑するという小話なのだそうです。しかし自分の命にかかわる重大決定をするのに、左右を見回して周囲に合わせようとする日本人。何かわびしい気持ちにさせられませんか。またこの小話がアメリカ人の作だという所にひっかかります。日本が一番のパートナーだと思っているアメリカ人から、日本人がこう見られているのです。

裁判員制度では9人の合議で決まるのですが、折角の裁判員が左右を見て、多数に追従するようであれば、健全な社会の良識を反映させることにはならないと懸念されます。自分の考えや判断をはっきりと示す人に裁判員になってもらわなければなりませんね。

また「弱い人を訴訟において曲げてかばってはならない」といういましめにも、おやと思いませんか。私たちは、強い者に反対できず我が身を守ってしまい勝ちです。新共同訳が「多数者に追従して」と訳しているところを、新改訳は「悪を行なう権力者の側に立つ」と訳しています。だからこそ一層「強きをくじき、弱きを扶ける」という義侠心、弱者を守り我が身を顧みずに強者に立ち向かう心意気に惹かれます。偉いなあ、そうしなければと思いき勝ちです。しか神さまは、情に流されて正義を曲げるようなことがあってはならないとはっきりお命じになるのです。

「わたしは悪人を、正しいとすることはしない」。弱いとか貧しいから守ってあげるのではなく、正しいことを正しいとし、悪いことは誰がしても悪いとすることが、正しい社会秩序の基盤なのです。多数に追従しない、情に流されないためには、知性と良心を磨いて、神さまが示す正しさに立つことが、大切なのですね。

### [3] いましめを守れていない現実

「自分の敵の牛・ロバが迷っていたら、必ず彼のもとに連れ戻す」「自分を憎む者のロバが荷物の下敷きになって倒れていたら、必ず助け起こす」。敵とか憎む者とは、裁判で争っている相手を言うそうです。ですからこれは、裁判は裁判、しかしその相手も日常生活では隣人なのだから、助け合う心を失ってはいけないといういましめです。難しいいましめです。でもよくよく考えてみますと、私たちは皆、一つの共同体の一員なのです。たまたま利害がぶつかり、争うことが起こったとしても、助け合いを必要とする共同体の仲間であることに、変わりはないのです。いたわり合う心を失っては、共同体は崩れてしまうのですから。

「あなたは寄留者を虐げてはならない。あなたたちは寄留者の気持を知っている。あなたたちは、エジプトの国で寄留者であったからである」。私たち夫婦は1985年の6月末から7月中旬にかけてイスラエルの国を訪れました。四国位の広さに人口約400万人、83%がユダヤ人で、16%がパレスチナ人その他でした。ユダヤ人が絶対多数の国です。人種・宗教の違いを超えて、仲良く一つの国家を作っているのでしょうか。ヘブライ大学の教授に質問してみました。彼の奥さんは日本人です。彼はこう答えたのです。

「我々ユダヤ人はこの2000年間、祖国を失い、離散の民として、世界各地で寄留者として生きることを余儀なくされて来ました。土地を持つことを許されず、都市の内で少数者の悲哀をなめ尽しながら生きて来ました。どうして今同じ国内に居る少数者を虐げることが出来ましょうか」。なるほど「エジプトで寄留者だったのだから、寄留者の気持を知っているはずだ」という聖書の戒めが、今日もユダヤ人の間に生きているのだなと感心しました。

ところが翌日のことです。エルサレムの神殿の境内で、ガザからやってきたパレスチナ人中学生3人が話しかけてきたのです。「日本人か。話を聞いてくれ。ユダヤ人たちはパレスチナ人の土地を奪い、追い出し

てガザに押し込めた。夜9時以降は外出禁止。うっかり身分証明書を持たずにガザの外に出ると、殴られたり、蹴られたり酷い目に遭わされる。自分たちの国なのに、自由に生きていけないのだ。日本人よ、どうか助けて欲しい。」

パレスチナ人をガザ地区に隔離し、自分たちはイスラエル全土の都会や入植地で豊かに暮すユダヤ人たちは、パレスチナ人少年たちの閉塞感と激しい怒り、憎しみを肌で感じていないのです。自分たちは「寄留者を虐げてはならない」という聖書の教え通りに、パレスチナ人を虐げてはいないと思い込んでいるだけなのでした。

アメリカのオバマ大統領就任式直前に、イスラエルはガザに激しく爆弾の雨を降らせて、大勢の人々を殺しました。ガザ地区から絶えず打ち込んでくるロケット砲撃に対する報復だと主張していました。しかし狭い所に押し込められ、働く仕事もない閉塞感が、若者たちを ロケット砲撃に駆り立てている現実を、イスラエルは見ようとしていません。荷物の下敷きになって倒れているパレスチナ人のロバを助け起こそうとはしていません。聖書の教えは守られていないのです。

### [結] 福音の恵み

ここにいくら十戒やおきてを与えられても、それだけでは正しい社会は生まれませんし、私たちは救われないという現実が、はっきりと示されているのではないのでしょうか。ここに旧約聖書の限界があります。そこで正しい律法を守ることが出来ず、罪を犯して自分も他の人も共に傷つき、倒れる私たちを救ってくださるために、神さまがイエス・キリストの十字架の恵み与えて下さったのでした。新約聖書の福音です。

私たちは正しいいましめを守ろうとすればするほど、自分の罪深い性質を深く自覚させられます。それゆえにこそ謙遜にさせられ、心からキリストにある罪の赦しと正しさを求めるようにされます。神さまはそのような私たちに、神さまの霊、聖霊さまを注いで、私たちを変えて下さるのです。神の子らしく変えて下さるのです。こうして私たちは、正しい裁判によって正しい社会秩序を整えていけるようになるのです。

旧約聖書は神さまの正しい律法を示します。そして新約聖書は、どうしても律法を守る事の出来ない私たちに、十字架の赦しと聖霊の助けの福音をもたらしてくれました。私たちは旧約聖書と新約聖書をあわせて聖典として信じる信仰者です。

完